

江戸期における橋梁の利用目的とその変遷に関する一考察

信州大学 ○湯浅 卓夫

信州大学 学生員 山本 太郎

信州大学 正 員 清水 茂

1. はじめに

ある場所に新設または改架される橋梁はその地域にさまざまな影響を与える。例えばその架設により、交通・流通・経済・防災・娯楽・軍事などの要素に変化がみられる。橋梁の利用目的や、橋梁の架設が市街地に与える影響を調べることで、その周辺地域の都市機能を把握することができる。また、時間の経過にともなう、橋梁周辺の市街地の変化を調べることで、その地域の時代背景の移り変わりを知ることができる。

橋梁の利用目的、橋梁が周辺の市街地に与える影響を調べるにあたり、橋梁と道路の位置関係が大きく関与してくることが考えられる。これは、道路と橋梁の取り付け位置の違いによって、人々の往来や物資の流れが変わってくるためである。

本研究では江戸時代に架設された橋梁を対象とする。これは、江戸の市街地の開発が、江戸時代において顕著に拡大していったため、開発の過程を捉えやすいからである。

このようなことから、当時の橋梁と道路の関係における橋梁の利用目的の変化、周辺地域のようすを時代を追って考察していく。

2. 研究方法

江戸期における橋梁のようすを調べるにあたり、史料、古地図、浮世絵等を資料として用いる。さらに先に作成された江戸府内の橋梁に関するデータベース¹⁾を使用する。これには史料、古地図、浮世絵等からの情報が体系的に納められているので、時代を追って橋梁の推移を調査することができる。

古地図³⁾は1624年～1860年の間で6種類を使用した。これらは視覚的に橋梁の線形性、橋詰め広場の有無を容易に把握することができるため、たいへん有効である。

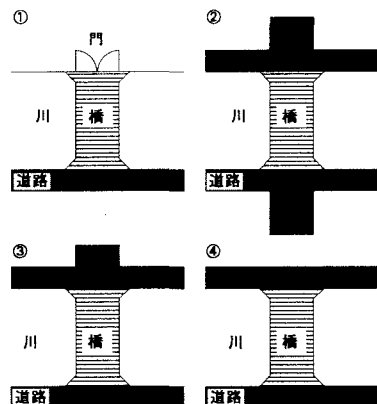
研究手順としてまずデータベースより必要となるデータを検索、抽出し時期ごとに調べる。次いで、古地図により時代を追って視覚的に把握できるデータを抽出する。これらを整理した上で、それぞれの変化を関連づけ総合的に考察を行う。

3. 橋梁と道路の線形との関係の区分

本研究において、古地図からの情報を整理するため橋梁と道路の線形の関係を図のように主に見られる4つのタイプに分ける。道路の線形が橋軸方向と一致するものに注目する。

- ①城門に架かる橋梁。
- ②兩岸とも道路の線形が橋軸方向と一致する。
- ③片方の岸だけ道路の線形が橋軸方向と一致する。
- ④兩岸とも道路の線形と橋軸方向が一致しない。

この分類において各時代の古地図より橋梁と道路との関係を調査する。



このように区分けしたのは以下の理由による。家康入国後より江戸は急速に拡大していき多くの橋梁が架けられたが同じ河川や堀に架けられた橋梁でも道路との関係によりその周辺の都市機能や利用目的が大きく変化するためである。

4. 結果

下の表は、古地図を橋梁と道路の関係についてまとめたものである。対象となった橋梁は各時代の古地図からよみとれるすべての橋梁とした。下の表より1657年に橋梁の総数が急激に増加している。これは、明暦の大火後の江戸市街地の拡大時期と一致しており②、③のタイプが増加していることがわかる。1733年、1771年、1797年には変化はみられない。これは、江戸市街地の拡大がある程度収まりをみせてきた時期であると考えることができる。1860年にも橋梁の総数が増加しているがこれは、地図の範囲が他の地図と比べてやや広いためである。つまりこの時期にも市街地が拡大しているということがいえる。

表一 橋梁と道路との関係

西暦	総数	①	②	③	④
1624	54	15	20	12	7
1657	106	16	52	29	9
1733	107	21	51	25	10
1771	107	21	51	25	10
1797	107	21	51	25	10
1860	160	21	74	40	24

4. 結果分析及び考察

家康が江戸に入国してより明暦の大火までの期間。①のタイプの橋梁は城門により容易に渡ることができないようになっており、また城門の対岸には橋軸方向に道路の線形がみられないことから、主に軍事目的であったと推察できる。②のタイプは主に江戸城周辺に多く見られ、郊外には点在している。②タイプは、江戸市街地の開発と同時に架設されたと考えられる。また新市街地開発の幹線道路として利用されていたと推察できる。③のタイプは江戸城周辺と郊外との境とみれる河川や堀に多く見られる。③のタイプは、市街地開発時期の違いによる道路の線形と橋軸方向とのずれであると考えられる。そのずれは、新市街地を形成後、旧市街地の道路の線形に合わせて新市街地へ架設されているため、道路に生じたものと考えられる。④のタイプは、②、③のタイプの周辺にみられる。④のタイプは、市街地が形成された後に架けられたと考えることができ、人々の往来を円滑にしていたと推察できる。

明暦の大火以降。本所・深川の開発が行われそこでも多くの橋梁が新設されていった。①のタイプの数には変化は見られないが、②と③のタイプの数が増えている。これは、先にも述べたように②と③のタイプは市街地の開発に深く関わっている橋梁だからと考えられる。

1733年から1797年の間の江戸市街地開発がある程度収まりを見せている時期については、橋数に多少の変化がみられるが大きな変化ではない。

その他の結果、詳細については、当日発表する。

【参考文献】

- 1) 山本 清水：江戸府内の橋梁に関するデータベースの作成、土木史研究 第十五号、pp.553 1995
- 2) 古地図各種
- 3) 東京市役所：東京市史稿 橋梁編、1936
- 4) 白石 つとむ 編：江戸切り絵図と東京名所絵 小学館